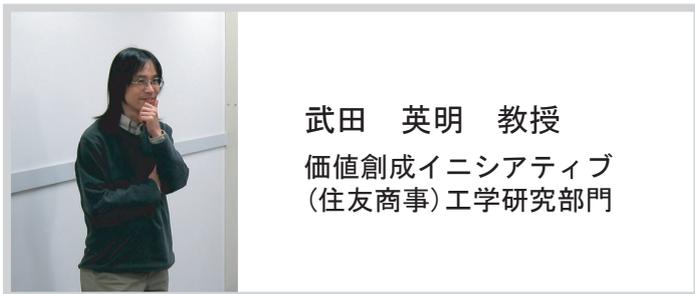




着任の辞



私は東大の精密機械工学専攻の博士課程を91年に出て以来、東大の外で活動していたので、今回の寄付研究部門の職は、いわば15年ぶり東大に里帰りということになります。里帰りといっても人工物工学研究センター（RACE）は私が通った本郷とはずいぶん離れた柏にあり、また建物も出来たばかりであり、戻ってきたという感はずいぶんありません。新しいところに来た気分です。私は東大を出て以来、奈良先端科学技術大学院大学、国立情報学研究所と実は新設のところばかりに赴任してきました。いつも研究室は初めて使うピンピカでした。私はよく周りに、私がまた転任するとしたら新設のところだよ、と冗談で言っていました。今回も半分はあつたようです。個人的には工学部2号館のような古風な建物が好きなのですが、いつも叶わないのは不思議に思います。

東大とは離れていたとはいえ、人工物工学研究センターには、いろいろな意味で縁がありました。発足直後の科研費のグループに入れてもらい、初期のRACEのスタッフとはお付き合いをさせていただき、混沌たる状態からの模索過程を傍観者ながら感じさせていただきました。また、富山先生の未来開拓学術研究の「シンセシスのモデル論」に参加して以来の富山先生との関係、もっと最近では下村先生との共同研究と、10年間断続的にいろいろな形で関係がありました。そのRACEに正式に関わらせていただくというのも何かの縁だと思っています。

さて研究面の話ですが、今回の寄付研究部門の職は位置づけおよびテーマの点で大変な重責を感じています。まず寄付研究部門というポジションです。寄付研究部門のミッションとはまずは広く社会に貢献する研究を実施することにあると思っています。どんな研究でも、長い目でみればいずれは社会に貢献することを念頭においていますが、実際には社会との関わりは様々です。研究者はともすれば自分の属する学術コミュニティへの貢献を第一に考えがちです。もちろん、それも広い意味での社会への貢献であるが、寄付研究部門でももっと幅広く社会との関係を求めないといけないと思っています。例えば、社会における問題と学術コミュニティでの問題がどうマッチングするのか、そういったことから考えていけたらと思っています。

さらに「人工物と価値創成」という問題は大きな広がりをもつテーマです。人工物に関してはRACEを始めてとしてこれまで工学からいろいろな研究がなされてきました。一方、価値というのは、社会に由来をもつものであり、まさに社会に向かい合うという、これまでとは違うアプローチが必要です。このテーマにおいてはその両者の融合が求められています。私としては、モノからのアプローチである人工物オントロジー、ヒトの関係からのアプローチである社会ネットワーク、その両者を結びつける設計という、3つの視点から少しずつ、取り組んでいきたいと思っています。